

知的側面より見た幼稚園教育



帆足喜与子

幼稚園の子どもの知的生活を扱うことは保育の仕事の中で一番むづかしい——というか未だにはっきりした指針や方法が見つけれられていない分野だともいえます。情緒的生活に関しては最近たいへん進んでまいりました。大体の原則というものが一般に納得されていて、誰も、健康な精神を保たせるのに子どもの感情をどういうふうに扱ったらいいか互に知っているという感じですが。

幼児には情緒生活の方が大事なのだ、性格の基礎は幼稚園時代に作られるのであって、そのためには、情緒生活において豊かなあやまらぬ体験をさせることこそ大切だということとはほんとうだともいいますが、実はそれに甘んじて、子どもの知的生活をかえりみる努力がはらわれていないのが現実のようにみえます。情緒的要素が生活のどこにでもついでまわっているように、知的要素もまたどこにでも生活の中にあるのであって、やはりこれについての正しい指導が早くからなされれば将来立派な人間ができるにちがいありません。文化の高低を決するものはやはり知的要素であってみれば、性

格教育と並行してよい知的教育をして、子どもたちに立派な文化の創造者となってもらいたいものです。少し大きないい方をしようです。こんな大げさなことをいうと、お互にそんな事業は自分にとって大それたことだとおじけづいてしまいます。しかし現に子どもの前にいる以上、よかれあしかれ自分としてフルな知的影響を子どもに与えていることは事実ですから、その影響を出来るだけよいものにしてゆこうという気持に立って、知的生活の扱いについて心をくだいてゆきましょう。

知的教育は子どもの生活の中にある

子どもの精神は未分化なため、これが知的活動というようなものをはっきりとり出して示すことはできません。いいかえれば、知的な活動も例えば情緒的なものから分れておりません。相貌的な知覚できさえも子どもによって知的なおいがるのとそうでないのとあるといったふうです。小学校も二年三年から上となると各教科に分

れた知的な面が分明になってくるのとちがって、幼稚園の子については、どれを知的活動と呼び、どうやって知的教育をしたらよいのかはつきりしていないだけにやりにくいのです。つまり幼稚園ではいつどんな時でも知的教育を心がけていなければならないというのが根本の心構えです。

保育中お手洗に行つてなかなかもどつて来ない男の子がある。見に行くのと、洗面所の水道を出し放して流れ口を手で押さえて流しに水をため、手をちょっと放すと水がゴボゴボ流れ落ちるので、あわててまた押さえる。手が流れ口に扱いつく。といったことに夢中になつて、呼びかけてもうわのそらです。ふざけているのなら一齊保育中だからさつさとやめるように導くのが当然だけれども、その態度が如何にも物の性質を調べているようでしたので私はしばらく見ていてやがて一しよになつて話をしました。こんな場合勿論物理学的な述語など子どもは用いませんけれども、せわしく動作をかえて水を落としたり止めたりやっています。適応的な動作によつて、水自体の性質、水がほそい所をとおつて下へ落ちる、それをとどめることをマスターして自分も満足そうです。静かに部屋へ帰ると友だちは先生と仕事をしているので、ちょっと気おくれの様子を見せます。彼も時ならぬ時に他人とちがう事をして来たことに自分で気がついているのですから、それで十分で、さつきから叱つたりせず、彼が気がのつたチャンスに水いたずらをさせてよかつたのだと思ふわけです。この水いじりの経験は深く彼の印象に残つて、後日水というものを理解し、これを物理学的な述語で説明したり扱つた

りすることの基礎に役立っていることを疑いません。

幼児の概念化作用は未発達である

子どもの知的特徴として挙げられることはいろいろありますが、その一つは、現在目の前にないことについて明確な像を秩序だてて浮かべて見ることが困難であることです。そして現存するものについての實在感は恐らくおとなより強いでありましょうが、目前にないことについてはピンとこないのです。それは、幼稚園ぐらいの子どもにはある程度事物の概念化作用ができればじめてはいますが、まだまだどういふ状態であることが大いに関係しています。そういうふうな子どもに、その気になつていない時に、さつきやりかけた水遊びの話をしたり、もう一度あれをやつてごらん、などということはおよそ無意味なことです。概念化することができにくいから、ちようど機の熟した時に直接行動で経験を調べとるのです。その時に、知的な能力の高い子どもはそれなりの仕方によく観察し、よく動いて豊かな経験をえます。能力の低い子どもは彼なりの経験をえて、やはり将来の知的活動にそなえるわけです。

子どもたちは概念化がまだよくできないのですから、もの事の観察を主とし、原理を扱つたり、分類をしたりすることは子ども自身にイニシアティブがある場合をのぞいては、こちらから取り立てて話題にすることはしないがよいとおもいます。勿論子どももしばしば原理や規則性を見つけます。たいへんよい現象で喜ぶべきことです。それが子ども自身が見つけたから尊ぶべきなのであって、子

どもから尋ねられもしないのに、物事を概括したり、法則を教えたりにして、思考のチャンネルを固定し、せめてゆくの幼稚園時代には適当ではないとおもうのです。例えば昨日はつめたかったが今日は暖い風について、保育室の中で先生の方から、北風や南風のおこりをながながとしゃべるよりも、子どもが庭を走りながら昨日はつめたかったのに今日の風はあつたかくてやさしいということに気がつく場面の方がはるかによいのです。そんな時に、風の話を先生と子どものやりとりでできることがきたら更に効果的でしょう。子どもは多くのイメージを同時に頭の中に並べて、あれこれ比較考察することができませんから、理くつめいた話を、子どもに黙らせたまま話しつづけると、きき流しにした部分と受け取った部分とができてしまつて、結局いかじりの知識のようなものが残るだけとなります。

科学的、理論的な話がまとまって印象づけられるためには、童話ふうな形にされる必要があるとおもいます。そうすれば教え吹き込むような口調になることなく、思考をさそうお話ができるのではないでしようか。

知的活動の指導

先生に科学の知識があればあるほどいいのですが、子どもが発見し判断したことが、必らずしも学問的な見方からして正しくなかつたときに、否定したり訂正したりしてやるばかりが能ではなく、「そうね、そういう考え方もあるのですね。しかしまた別の考え方もあ

るかもしれない」というふうにしておく方がよいことがしばしばあります。

私どもの幼稚園に昆虫の大好きな男の子がいました。その子どもは自分の積極的興味で虫に関する本を親に買ってもらい、夏休みなどには立派な標本をつくりました。それが誰に作ってもらったのではないことは、標本をどうやって作るかいちいち説明してくれたので明らかでした。園庭に虫がいるとその生態を説明するのですが非常に正しいもので、わからないことがあると先生のところへ来て昆虫の本を出してくれと頼みました。またこの子は分類をすることもできかけていました。今日はテレビで昆虫のお話があるからと急いで家に帰るといふふうでした。このようなのはごく例外で、そんな場合は、こちらは完全にひきずられた形になりました。そして受持の先生は大いに彼のために資料を提供して支援をしたものでした。

このように自ら独立して継続的に何かに興味をもつ子でない場合は、いつも注意していて子どもが興味をもつたり疑問をもつ瞬間をつかまえて、ますます探究をすすめるように助け刺げきしてやるのがよいとおもいます。こちらが勿論正しい立派な答をすぐ出せなくてもいいのです。子どもも先生もわからなければ、お互いの宿題にするようにして、子どもの知的活動の芽を枯らしてしまうことのないようにしたいものです。

さきほどから概念化ということをたびたび申しましたが、概念化とはならないでも、頭の中にあるものですが、それがなお、他人と通じあうことによって訂正されあつて正しいものとして固定す

るためには、ことばとなることが必要です。しかし適切な短いことばで考えを表現できるようになるのはまだまだ先のことで、他人にわからせるようにと子どもが苦心した言いまわしが、本意はよくわかるのだけでもつぎはぎのようなものであることが始終です。そのような時、おせっかいをしすぎてことばを教えると、教わった単語に盛りきれない生活感がおき忘れられてしまうことがあります。子どもは特におとなの話において、ひとりでにだんだんに適当なことばを覚え同時に概念を形成してゆきます。が、またちようどもとめていることばを教えてやって、子どもが我が意を得たようにしてくれることもあります。

記憶力と知能

ことばということでおもい出されるのは、うたのことばなどをおぼえることが、子どもたちは意外に早いということです。また劇のせりふなど他人の分まで全部覚えてしまうのを、私たちはよく見ております。ところでうたを楽しんだり情操を養うことよりも、ことば自身を覚えることが大切であるかの如くに、きびしい態度でうたわせたり歌詞のおぼえちがいを丹念になおしたりするのを見ますが、それは的是がはずれているとおもいます。特に女の子は機械的記憶がすぐれているせいか、うたをよく覚えます。先生にほめていただけばうれいから一生けん命ことばをまぢがえないよううたい、正しくうたえるととてもお得意そうです。そんな時、何だか物足りない後味を感じることを否めません。ちよつと話がそれます

が、アメリカで死語であるラテン語の勉強が一体頭をよくするのに役立つかどうかが論じられているのを見聞きしたことがあります。これと、うたを覚えることとはもとよりちがうのですが、ただうたをきちんと覚えることが頭の訓練、もしくはきちんとするこの訓練になるかのような考え方が古い時代になりました。それが今でもどこどこに見受けられることに注意したいとおもいます。

記憶力と知能との相関はもとよりありますが、思ったより高くないようです。即ち物憶えのよいことがそのまま知能の高さを示しているのではないということです。同じく記憶でもこれは再認について私の調べた資料ですが、絵の再認と知能指数との相関は、男の子で〇・五〇、女の子で〇・四一でした。特に女の子には知能と記憶との関係が低くあらわれているのは日常の所見と一致するところ

です。
なお、数の扱いなど大切なことにふれないうちに紙数もつきてきました。数についてもただ今ずっと述べてきたようなことがあてはまります。ほんとうの観念がないのに、口で数字だけ唱えてもむだだということはどうよく知られた主張なのですけれども、それを知りながら、一般に口で大きい数を唱えることがひんぱんにおこなわれているのでしょうか。ここに思いきって、真に操作できる数にだけ親しませ、その範囲で具体的な物に即して足したり引いたり遊びをさせる工夫をしたいものだとおもいます。

(川村短期大学)